

今治明德  
短期大学

歩き遍路体験学習レポートから

②

「歩き遍路体験学習を終えて——得たもの」

田坂 知未  
私が地域文化論を受講した理由は、入試で「明德短大が初めて行った『歩き遍路』という授業に興味をもっている」と言ったことからである。

体験実習が始まり、初日から「あんなこと言うんじゃないかった」と後悔した。口では「歩く」と簡単に言えるが、実際はそうはいかなかった。一日中歩くだけという思考と、先達のペースについて行かなくては——というプレッシャーで朝から疲れていた。歩いている最中、どれほど「車に乗りたい」と思ったことか。日が暮れる頃には足が上がらなくなり、非常に辛い思いをしなが歩いた。宿を目にした瞬間、涙がこぼれそうになった。

二日目は昨日の反省もあり、なるべく先達の真後ろについて歩いた。四〇キロという長い道のりを夢中で歩いた。やはり「車に乗りたい」と、何度も思った。三日目は自分が先達に

なった。それまで先達が速度を変えるたびにイラついてたが、自分が先達になってはじめて「付いて歩く楽しさ」と「皆のペースを考えながら歩く難しさ」に気づいた。しかし、この日は先達というプレッシャーだけで、

写真を撮った。食欲も湧いてきて、金剛福寺ではモリモリご飯を食べた。四日目は、三日目よりもさらに楽に歩けた。初日、泣きそうになりながら歩いた自分が驚くほど、歩くことが楽しいと感じていたと思う。この

4日目、歩く楽しさ発見



明短生が赤泊の浜から神山山へ歩く

歩くことは苦にならなかつた。二日目に四〇キロも歩きましたという自信から景色を見る余裕さえできていた。水平線の見える海の広さに感動した。足摺岬の展望台に立ったときはじめて携帯を取り出し夢中になって

日は西田家(旧善根宿)を訪問した。沢山の納札があった。私は地元・広島市の袋を見せていただいた。私の実家に近い三原市の納札が見つかり、とても嬉しかった。実家に帰ったときとよく似た気持ちになった。

西田さんから納札の説明を聞かされ、昔の人が何を想いながら長い距離を歩いていたのかを知った。国が平和になることや家内安全を祈って歩いたそう。私自身は三つのお寺を見て回れることに、ある程度の楽しみを期待しながら参加していた。しかし昔の人は深い願いをもって歩いていたということ、その願いが

形になっている納札の量の多さに衝撃をうけた。西田さんの話を聞いたときから、私は楽しみよりも昔の人のことを考えながら歩いていたような気がする。山道を通るときも「こんな獣道を昔の人は祈りを込めて歩いたんだ」と感じるようになっていた。(中略)この遍路は、絶対

強い自信が生まれた

ついに最終日、車に乗りたいという考えは、頭の中から消え去っていった。しかし、足の痛みからくる「やっとな今日で終わる」という考えから、ペースが乱れていた。

しっかりと歩いていたと思う。この頃には橋で杖をつかないことを当たり前のようにならして、すれ違っても人にも恥ずかしがることなくあいさつをしていた。確実に歩くことに楽し

この日は松田家を訪問した。松田家にも昔の人が残した沢山の納札があった。松田さんは「毎年順番で延光寺にお札を納めに行くが、この行事も私達で終わらだと思」と話された。まだまだ遍路のことはよく知らないけど、「この文化は無くしたくないな、同時に「残りの距離をしっかりと歩こう」と思った。足の痛みもあり楽ではなかつたけど、いろいろな決心の後で足取りは

さを見つけていた。「もう少し、もう少し」と言いながら、国道に「延光寺」の標識が見えたときは本当に感動した。「ここまで来た。歩きました」。延光寺は五日間痛みの中で歩いた最終の目的地だったので、すごく大きく広いお寺を想像していたので、着いたときは「アレっ!!」と思ってしまう。帰りのバスでは、歩き

歩くことから始まった遍路だが、「この文化は若い人にも興味を持ってほしい」と思った。まだ十代の若い自分が五日間痛みをこらえて歩いたこと、その中で昔の人やお札を保存している人たちの思いに触れたということが心地よい重みとなった。「歩く」意味を言葉にすることは複雑すぎて難しいけれど、五日間歩きましたということが、これからの自分に強い自信を持たせるだろうと思う。

(第3種郵便物認可)